

# 血と雫 *je prie pour que la goutte ne tombe pas*

## 「空を瞬く」ディスクレビュー

November 8, 2013 / text : 小野島 大

---

夜の深く重い空気。エフェクトもなし鳴る楽音は、音のない空間に吸い込まれていき、闇に溶け込んでいってしまう。まるで世界でたったひとり取り残されたような非日常感と寂寥感。聴き終わったあとの、長い余韻が跡形もなく消え去るころ、またもう一度再生ボタンを押して、何度も聴いている。それは繰り返される死のイメージだ。

ところが昼間の陽光の中で窓を開け放して聴くと、子どもたちの歓声や、自転車のブレーキ音や、犬の鳴き声や、遠くで鳴る陽気な音楽の響きまでもが、音のない静寂だったはずの空間に否応なく入り込んでくる。だがファーストよりもさらにはったりじみたダイナミズムや過剰なエゴや感情移入を注意深く排した歌や演奏と、そうしたノイズは思いのほか自然になじみ、夜とはまったく違う印象の、しんなりとした空気感を醸し出す。そのあまりに自然な身振りは、光と日常に地続きのイメージを喚起する。

そうした本作の相反する両面は、そのまま生きることの矛盾と葛藤でもある。この世のすべてはどうにもならず、それでも生きていくしかないという諦念であり、決意であり、痛みであり、また希望でもある。

たった3人によるシンプルで起伏を抑えた演奏は、絶妙なタッチのミックスと入念に施されたマスタリングによる、奥行きと広がりとビロードのような手触りを感じさせる録音によって、確かな実在感と、静寂にもっとも近いところで揺らぎ消えていくような儚さを兼ね備えた。世界中どこにもない、血と雫だけの震えが結晶化した世界。いつまでもそばに置いて、時おり確かめてみる。生きている実感を確認し刻みつけるために。